

2 研究の実際

(1) 新学習指導要領に関わる理論研究

ア 小学校国語科で育成を目指す資質・能力

中央教育審議会『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）』（平成 28 年 12 月）では、子供たちに育成すべき資質・能力が「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱に整理（表 1）されました。また、平成 29 年 3 月に公示された新学習指導要領では、国語科において育成を目指す資質・能力が「国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力」と規定されました。

表 1 国語科において育成を目指す資質・能力の整理⁽¹⁾

国語科において育成を目指す資質・能力の整理		
知識・技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性等
<ul style="list-style-type: none"> ○言葉の働きや役割に関する理解 ○言葉の特徴やよきまりに関する理解と使い分け <ul style="list-style-type: none"> ・書き言葉（文字）、話し言葉、言葉の位相（方言、敬語等） ・語、語句、語彙 ・文の成分、文の構成 ・文章の構造（文と文の関係、段落、段落と文章の関係） ○言葉の使い方に関する理解と使い分け <ul style="list-style-type: none"> ・話し方、書き方、表現の工夫 ・聞き方、読み方、音読・朗読の仕方 ・話合いの仕方 ○書写に関する知識・技能 ○伝統的な言語文化に関する理解 ○文章の種類に関する理解 ○情報活用に関する知識・技能 	<p style="text-align: center;">国語で理解したり表現したりするための力</p> <p>【創造的・論理的思考の側面】</p> <ul style="list-style-type: none"> ➢情報を多面的・多角的に精査し構造化する力 <ul style="list-style-type: none"> ・推論及び既有知識・経験による内容の補足、精緻化 ・論理（情報と情報の関係性：共通－相違、原因－結果、具体－抽象等）の吟味・構築 ・妥当性、信頼性等の吟味 ➢構成・表現形式を評価する力 <p>【感性・情緒の側面】</p> <ul style="list-style-type: none"> ➢言葉によって感じたり想像したりする力、感情や想像を言葉にする力 ➢構成・表現形式を評価する力 <p>【他者とのコミュニケーションの側面】</p> <ul style="list-style-type: none"> ➢言葉を通じて伝え合う力 <ul style="list-style-type: none"> ・相手との関係や目的、場面、文脈、状況等の理解 ・自分の意思や主張の伝達 ・相手の心の想像、意図や感情の読み取り ➢構成・表現形式を評価する力 <p>≪考えの形成・深化≫</p> <ul style="list-style-type: none"> ➢考えを形成し深める力（個人または集団として） <ul style="list-style-type: none"> ・情報を編集・操作する力 ・新しい情報を、既に持っている知識や経験、感情に統合し構造化する力 ・新しい問いや仮説を立てるなど、既に持っている考えの構造を転換する力 	<ul style="list-style-type: none"> ・言葉が持つ曖昧性や、表現による受け取り方の違いを認識した上で、言葉が持つ力を信頼し、言葉によって困難を克服し、言葉を通して社会や文化を創造しようとする態度 ・言葉を通じて、自分のものの見方や考え方を広げ深めようとするとともに、考えを伝え合うことで、集団としての考えを発展・深化させようとする態度 ・様々な事象に触れたり体験したりして感じたことを言葉にすることで自覚するとともに、それらの言葉を互いに交流させることを通して、心を豊かにしようとする態度 ・言葉を通じて積極的に人や社会と関わり、自己を表現し、他者の心と共感するなど互いの存在についての理解を深め、尊重しようとする態度 ・我が国の言語文化を享受し、生活や社会の中で活用し、継承・発展させようとする態度 ・自ら進んで読書をし、本の世界を想像したり味わったりするとともに、読書を通して様々な世界に触れ、これを擬似的に体験したり知識を獲得したり新しい考えに出会ったりするなどして、人生を豊かにしようとする態度

国語科の場合、他の教科等と異なり、育成を目指す資質・能力が校種別に区分して示されていません。これは、言葉そのものを学習対象とする国語科においては、指導内容が「系統的・段階的に上の学年につながっていくとともに、螺旋的・反復的に繰り返しながら学習し、資質・能力の定着を図ることを基本としている」⁽²⁾ためと考えられます。

また、新学習指導要領解説には今回の改訂の基本的な考え方として次のような記述があります⁽³⁾。

知識及び技能の習得と思考力、判断力、表現力等の育成のバランスを重視する平成 20 年改訂の学習指導要領の枠組みや教育内容を維持した上で、知識の理解の質を更に高め、確かな学力を育成すること。
 （※下線は本研究委員会による。）

文部科学省 『小学校学習指導要領解説国語編』 平成 29 年 7 月 まえがき

新学習指導要領では、現行学習指導要領から引き継がれた要素に、知識の理解の質を更に高めるための要素が新たに付加されたことが分かります。そこで、国語科の目標の文言について、それぞれの学習指導要領を対応させて、図 1 のように整理してみました。下線部は、両者に共通した文言若しくは同一の内容を示すと判断した文言です。

新学習指導要領の目標	現行学習指導要領の目標
<p><u>言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力</u>を次のとおり育成することを旨とする。</p>	<p><u>国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、</u></p>
<p>(1) <u>日常生活に必要な国語</u>について、<u>その特質を理解し適切に使うことができるように</u>する。</p> <p style="text-align: center;">知識及び技能</p>	
<p>(2) <u>日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を養う。</u></p> <p style="text-align: center;">思考力、判断力、表現力等</p>	<p><u>伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力及び</u></p>
<p>(3) <u>言葉がもつよさを認識するとともに、言語感覚を養い、国語の大切さを自覚し、国語を尊重してその能力の向上を図る態度</u>を養う。</p> <p style="text-align: center;">学びに向かう力、人間性等</p>	<p><u>言語感覚を養い、国語に対する関心を深め国語を尊重する態度を育てる。</u></p>

図 1 国語科の目標についての比較対照表

図 1 の下線部の内容を横並びに比較すると、新学習指導要領で育成を目指す資質・能力は、現行学習指導要領とほぼ変わっていないことが分かります。

現行学習指導要領から新学習指導要領へ引き継がれている資質・能力		
○適切に表現する（資質・）能力	○正確に理解する（資質・）能力	○伝え合う力
○思考力や想像力	○言語感覚	
○国語を尊重する態度		

では、新たに付加された文言に着目してみましょう。

言葉による見方・考え方を働かせ

資質・能力を育成するためには、児童が言葉による見方・考え方を働かせることが必要だとされています。言葉による見方・考え方を働かせるとは、「児童が学習の中で、対象と言葉、言葉と言葉との関係を、言葉の意味、働き、使い方等に注目して捉えたり問い直したりして、言葉への自覚を高めることである」⁽⁴⁾とされています。つまり、言葉で表現されている話や文章を、言葉の様々な側面から総合的に判断して理解したり表現したりすること、また、その理解や表現について、改めて意識的に吟味することと言えます。

言語活動を通して

言語活動の重要性については、これまでも述べられてきており、国語科の内容(2)として示された言語活動例を通して(1)の指導事項を指導することとされてきました。今回の改訂では、目標にも明確に示されたことで、資質・能力の育成のために、言語活動を通して学ばせることが大前提となされました。

日常生活に必要な国語について、その特質を理解し適切に使うことができるように

日常生活における人との関わりの中で

現行学習指導要領解説においても、目標の説明として「日常生活に生きて働くよう」「実生活で生きて働くように」といった文言が記載されていましたが、今回の改訂では、こうした意味合いをより強調するために、前面に打ち出したものと考えられます。個々の知識や技能としてではなく、「生きて働く知識・技能」として習得させることが求められていることが分かります。

また、人工知能が飛躍的に進化する時代にあっては、子供たちが様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことが、学校教育に求められることの1つとして挙げられています。これから求められている児童像が、「人との関わりの中で」という文言に反映していると考えられます。

言葉がもつよさを認識する

新学習指導要領解説では、「言葉がもつよさ」として、「言葉によって自分の考えを形成したり新しい考えを生み出したりすること、言葉から様々なことを感じたり、感じたことを言葉にしたりすることで心を豊かにすること、言葉を通じて人や社会と関わり自他の存在について理解を深めたりすること」⁽⁵⁾が挙げられています。ここでも、これから学校教育に育成を求められる児童像が具体化されていることが分かります。

国語の大切さを自覚し、国語を尊重してその能力の向上を図る

この部分に関しては、現行学習指導要領から追記された説明は、ほぼありません。現行学習指導要領の「国語に対する関心を深め」に当たる内容を、より具体化して示されたのが、「言葉がもつよさを認識」することと、「国語の大切さを自覚」することだと考えました。

以上のことを踏まえて、新学習指導要領において、小学校国語科で育成を目指す資質・能力を、**次頁表2**のように整理しました。

表 2 小学校国語科で育成を目指す資質・能力

知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力、人間性等																																																														
<p>(1) 言葉の特徴や使い方に関する事項</p> <table border="1" style="width: 100%;"> <tr> <td style="background-color: #90ee90;">言葉の働き</td> <td>言葉の働きを客観的に捉え、言葉がもつ働きに気付くことができる。</td> </tr> <tr> <td style="background-color: #90ee90;">話し言葉と書き言葉</td> <td>文字と音声との対応や語の認識、分りやすく明確な話し方をすることができる。また、書き言葉のきまりを理解して使用することができる。</td> </tr> <tr> <td style="background-color: #90ee90;">漢字</td> <td>漢字を確実に書き、使うことができる。</td> </tr> <tr> <td style="background-color: #90ee90;">語彙</td> <td>語句の量を増やし、語句のまとまりや関係、構成や変化について理解することができる。</td> </tr> <tr> <td style="background-color: #90ee90;">文や文章</td> <td>主語と述語、修飾と被修飾との関係などに加えて、語順などの特徴について理解することができる。また、指示する語句や接続する語句の役割についての理解を基盤に、文と文との関係、話や文章の構成や展開などについて理解することができる。</td> </tr> <tr> <td style="background-color: #90ee90;">言葉遣い</td> <td>相手や場面などに応じて言葉を選んだり、適切に使い分けたりすることができる。</td> </tr> <tr> <td style="background-color: #90ee90;">表現の技法</td> <td>比喩や反復などの表現の工夫に気付くことができる。</td> </tr> <tr> <td style="background-color: #90ee90;">音読、朗読</td> <td>語のまとまりや言葉の響き、文章全体の構成を意識して音読したり朗読したりすることができる。</td> </tr> </table> <p>(2) 情報の扱い方に関する事項</p> <table border="1" style="width: 100%;"> <tr> <td style="background-color: #90ee90;">情報と情報との関係</td> <td>話や文章に含まれている情報と情報との関係を捉えて理解したり、自分のもつ情報と情報との関係を明確にして話や文章で表現したりすることができる。</td> </tr> <tr> <td style="background-color: #90ee90;">情報の整理</td> <td>情報を取り出し活用したりする際に行う整理の仕方やそのための具体的な手段を理解することができる。</td> </tr> </table> <p>(3) 我が国の言語文化に関する事項</p> <table border="1" style="width: 100%;"> <tr> <td style="background-color: #90ee90;">伝統的な言語文化</td> <td>我が国の言語文化に触れ、親しんだり、楽しんだりするとともに、その豊かさに気付き、理解を深めることができる。</td> </tr> <tr> <td style="background-color: #90ee90;">言葉の由来や変化</td> <td>漢字の構成や言葉の由来について理解することができる。</td> </tr> <tr> <td style="background-color: #90ee90;">書写</td> <td>学習活動や日常生活に生かすことのできる書写の能力を身に付けることができる。</td> </tr> <tr> <td style="background-color: #90ee90;">読書</td> <td>自ら進んで読書をし、読書を通して人生を豊かにしようとする態度を養うことができる。</td> </tr> </table>	言葉の働き	言葉の働きを客観的に捉え、言葉がもつ働きに気付くことができる。	話し言葉と書き言葉	文字と音声との対応や語の認識、分りやすく明確な話し方をすることができる。また、書き言葉のきまりを理解して使用することができる。	漢字	漢字を確実に書き、使うことができる。	語彙	語句の量を増やし、語句のまとまりや関係、構成や変化について理解することができる。	文や文章	主語と述語、修飾と被修飾との関係などに加えて、語順などの特徴について理解することができる。また、指示する語句や接続する語句の役割についての理解を基盤に、文と文との関係、話や文章の構成や展開などについて理解することができる。	言葉遣い	相手や場面などに応じて言葉を選んだり、適切に使い分けたりすることができる。	表現の技法	比喩や反復などの表現の工夫に気付くことができる。	音読、朗読	語のまとまりや言葉の響き、文章全体の構成を意識して音読したり朗読したりすることができる。	情報と情報との関係	話や文章に含まれている情報と情報との関係を捉えて理解したり、自分のもつ情報と情報との関係を明確にして話や文章で表現したりすることができる。	情報の整理	情報を取り出し活用したりする際に行う整理の仕方やそのための具体的な手段を理解することができる。	伝統的な言語文化	我が国の言語文化に触れ、親しんだり、楽しんだりするとともに、その豊かさに気付き、理解を深めることができる。	言葉の由来や変化	漢字の構成や言葉の由来について理解することができる。	書写	学習活動や日常生活に生かすことのできる書写の能力を身に付けることができる。	読書	自ら進んで読書をし、読書を通して人生を豊かにしようとする態度を養うことができる。	<p>A 話すこと・聞くこと</p> <table border="1" style="width: 100%;"> <tr> <td style="background-color: #90ee90;">話題の設定、情報の収集、内容の検討</td> <td>日常生活の中から話題を決め、集めた材料から必要な事項を選んだり、その内容を検討したりすることができる。</td> </tr> <tr> <td style="background-color: #90ee90;">構成の検討、考えの形成(話すこと)</td> <td>話の内容が明確になるように、構成を考えることを通して、自分の考えを形成することができる。</td> </tr> <tr> <td style="background-color: #90ee90;">表現、共有(話すこと)</td> <td>適切に内容を伝えるために、音声表現を工夫したり、資料を活用したりすることができる。</td> </tr> <tr> <td style="background-color: #90ee90;">構造と内容の把握、精査・解釈、考えの形成、共有(聞くこと)</td> <td>話し手が伝えたいことと自分が聞く必要のあることの両面を意識しながら聞き、感想や考えを形成することができる。</td> </tr> <tr> <td style="background-color: #90ee90;">話合いの進め方の検討、考えの形成、共有(話し合うこと)</td> <td>進行を意識して話し合い、互いの意見や考えなどを聞かせながら、考えをまとめたり広げたりすることができる。</td> </tr> </table> <p>B 書くこと</p> <table border="1" style="width: 100%;"> <tr> <td style="background-color: #90ee90;">題材の設定、情報の収集、内容の検討</td> <td>書くことを見付けたり、相手や目的、意図に応じて書くことを選んだりするとともに、必要な材料を整理し、伝えたいことを明確にすることができる。</td> </tr> <tr> <td style="background-color: #90ee90;">構成の検討</td> <td>自分の思いや考えが明確になるように文章の構成を考えることができる。</td> </tr> <tr> <td style="background-color: #90ee90;">考えの形成、記述</td> <td>自分の考えを明確にし、書き表し方を工夫することができる。</td> </tr> <tr> <td style="background-color: #90ee90;">推敲</td> <td>記述した文章を読み返し、構成や書き表し方などに着目して文や文章を整えることができる。</td> </tr> <tr> <td style="background-color: #90ee90;">共有</td> <td>文章に対する感想や意見を伝え合い、自分の文章の内容や表現のよいところを見付けることができる。</td> </tr> </table> <p>C 読むこと</p> <table border="1" style="width: 100%;"> <tr> <td style="background-color: #90ee90;">構造と内容の把握</td> <td>叙述に基づいて、文章がどのような構造になっているか、どのような内容が書かれているかを把握することができる。</td> </tr> <tr> <td style="background-color: #90ee90;">精査・解釈</td> <td>構成や叙述などに基づいて、文章の内容や形式について、精査・解釈することができる。</td> </tr> <tr> <td style="background-color: #90ee90;">考えの形成</td> <td>文章を読んで理解したことなどに基づいて、自分の考えを形成することができる。</td> </tr> <tr> <td style="background-color: #90ee90;">共有</td> <td>文章を読んで感じたことや考えたことを共有し、自分の考えを広げることができる。</td> </tr> </table>	話題の設定、情報の収集、内容の検討	日常生活の中から話題を決め、集めた材料から必要な事項を選んだり、その内容を検討したりすることができる。	構成の検討、考えの形成(話すこと)	話の内容が明確になるように、構成を考えることを通して、自分の考えを形成することができる。	表現、共有(話すこと)	適切に内容を伝えるために、音声表現を工夫したり、資料を活用したりすることができる。	構造と内容の把握、精査・解釈、考えの形成、共有(聞くこと)	話し手が伝えたいことと自分が聞く必要のあることの両面を意識しながら聞き、感想や考えを形成することができる。	話合いの進め方の検討、考えの形成、共有(話し合うこと)	進行を意識して話し合い、互いの意見や考えなどを聞かせながら、考えをまとめたり広げたりすることができる。	題材の設定、情報の収集、内容の検討	書くことを見付けたり、相手や目的、意図に応じて書くことを選んだりするとともに、必要な材料を整理し、伝えたいことを明確にすることができる。	構成の検討	自分の思いや考えが明確になるように文章の構成を考えることができる。	考えの形成、記述	自分の考えを明確にし、書き表し方を工夫することができる。	推敲	記述した文章を読み返し、構成や書き表し方などに着目して文や文章を整えることができる。	共有	文章に対する感想や意見を伝え合い、自分の文章の内容や表現のよいところを見付けることができる。	構造と内容の把握	叙述に基づいて、文章がどのような構造になっているか、どのような内容が書かれているかを把握することができる。	精査・解釈	構成や叙述などに基づいて、文章の内容や形式について、精査・解釈することができる。	考えの形成	文章を読んで理解したことなどに基づいて、自分の考えを形成することができる。	共有	文章を読んで感じたことや考えたことを共有し、自分の考えを広げることができる。	<table border="1" style="width: 100%;"> <tr> <td style="background-color: #ffffcc;">第 1 学年及び第 2 学年</td> <td>言葉がもつよさを感じるとともに、楽しんで読書をし、国語を大切に、思いや考えを伝え合おうとすることができる。</td> </tr> <tr> <td style="background-color: #ffffcc;">第 3 学年及び第 4 学年</td> <td>言葉がもつよさに気付くとともに、幅広く読書をし、国語を大切に、思いや考えを伝え合おうとすることができる。</td> </tr> <tr> <td style="background-color: #ffffcc;">第 5 学年及び第 6 学年</td> <td>言葉がもつよさを認識するとともに、進んで読書をし、国語の大切さを自覚して思いや考えを伝え合おうとすることができる。</td> </tr> </table>	第 1 学年及び第 2 学年	言葉がもつよさを感じるとともに、楽しんで読書をし、国語を大切に、思いや考えを伝え合おうとすることができる。	第 3 学年及び第 4 学年	言葉がもつよさに気付くとともに、幅広く読書をし、国語を大切に、思いや考えを伝え合おうとすることができる。	第 5 学年及び第 6 学年	言葉がもつよさを認識するとともに、進んで読書をし、国語の大切さを自覚して思いや考えを伝え合おうとすることができる。
言葉の働き	言葉の働きを客観的に捉え、言葉がもつ働きに気付くことができる。																																																															
話し言葉と書き言葉	文字と音声との対応や語の認識、分りやすく明確な話し方をすることができる。また、書き言葉のきまりを理解して使用することができる。																																																															
漢字	漢字を確実に書き、使うことができる。																																																															
語彙	語句の量を増やし、語句のまとまりや関係、構成や変化について理解することができる。																																																															
文や文章	主語と述語、修飾と被修飾との関係などに加えて、語順などの特徴について理解することができる。また、指示する語句や接続する語句の役割についての理解を基盤に、文と文との関係、話や文章の構成や展開などについて理解することができる。																																																															
言葉遣い	相手や場面などに応じて言葉を選んだり、適切に使い分けたりすることができる。																																																															
表現の技法	比喩や反復などの表現の工夫に気付くことができる。																																																															
音読、朗読	語のまとまりや言葉の響き、文章全体の構成を意識して音読したり朗読したりすることができる。																																																															
情報と情報との関係	話や文章に含まれている情報と情報との関係を捉えて理解したり、自分のもつ情報と情報との関係を明確にして話や文章で表現したりすることができる。																																																															
情報の整理	情報を取り出し活用したりする際に行う整理の仕方やそのための具体的な手段を理解することができる。																																																															
伝統的な言語文化	我が国の言語文化に触れ、親しんだり、楽しんだりするとともに、その豊かさに気付き、理解を深めることができる。																																																															
言葉の由来や変化	漢字の構成や言葉の由来について理解することができる。																																																															
書写	学習活動や日常生活に生かすことのできる書写の能力を身に付けることができる。																																																															
読書	自ら進んで読書をし、読書を通して人生を豊かにしようとする態度を養うことができる。																																																															
話題の設定、情報の収集、内容の検討	日常生活の中から話題を決め、集めた材料から必要な事項を選んだり、その内容を検討したりすることができる。																																																															
構成の検討、考えの形成(話すこと)	話の内容が明確になるように、構成を考えることを通して、自分の考えを形成することができる。																																																															
表現、共有(話すこと)	適切に内容を伝えるために、音声表現を工夫したり、資料を活用したりすることができる。																																																															
構造と内容の把握、精査・解釈、考えの形成、共有(聞くこと)	話し手が伝えたいことと自分が聞く必要のあることの両面を意識しながら聞き、感想や考えを形成することができる。																																																															
話合いの進め方の検討、考えの形成、共有(話し合うこと)	進行を意識して話し合い、互いの意見や考えなどを聞かせながら、考えをまとめたり広げたりすることができる。																																																															
題材の設定、情報の収集、内容の検討	書くことを見付けたり、相手や目的、意図に応じて書くことを選んだりするとともに、必要な材料を整理し、伝えたいことを明確にすることができる。																																																															
構成の検討	自分の思いや考えが明確になるように文章の構成を考えることができる。																																																															
考えの形成、記述	自分の考えを明確にし、書き表し方を工夫することができる。																																																															
推敲	記述した文章を読み返し、構成や書き表し方などに着目して文や文章を整えることができる。																																																															
共有	文章に対する感想や意見を伝え合い、自分の文章の内容や表現のよいところを見付けることができる。																																																															
構造と内容の把握	叙述に基づいて、文章がどのような構造になっているか、どのような内容が書かれているかを把握することができる。																																																															
精査・解釈	構成や叙述などに基づいて、文章の内容や形式について、精査・解釈することができる。																																																															
考えの形成	文章を読んで理解したことなどに基づいて、自分の考えを形成することができる。																																																															
共有	文章を読んで感じたことや考えたことを共有し、自分の考えを広げることができる。																																																															
第 1 学年及び第 2 学年	言葉がもつよさを感じるとともに、楽しんで読書をし、国語を大切に、思いや考えを伝え合おうとすることができる。																																																															
第 3 学年及び第 4 学年	言葉がもつよさに気付くとともに、幅広く読書をし、国語を大切に、思いや考えを伝え合おうとすることができる。																																																															
第 5 学年及び第 6 学年	言葉がもつよさを認識するとともに、進んで読書をし、国語の大切さを自覚して思いや考えを伝え合おうとすることができる。																																																															

(本研究委員会による整理)



拡大します (A3版)

クリック

イ 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進

これからの時代に求められる資質・能力を子供たちが身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けることができるようにするためには、「我が国の優れた教育実践に見られる普遍的な視点である『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善（アクティブ・ラーニングの視点に立った授業改善）を推進することが求められる」⁽⁶⁾とされています。本研究委員会では、「主体的・対話的で深い学び」と、そうした学びを実現した児童の姿について、次のように捉え、例を挙げました。

主体的な学び 子供自身が目的や必要性を意識しながら、課題の解決に向けて思考を働かせること。

- (例) モデル文と自分自身の文章の書きぶりを比較することで自分の問題点に気づき、既習の知識を活用しながら問題の解決方法を考えて、学習への見通しをもっている。
- (例) 生活科で見つけた昆虫について友達に詳しく紹介したいという目的意識をもち、必然性をもって書く際のポイント（観点）を習得している。
- (例) 音読発表会に向けて登場人物の心情が伝わる音読の仕方を考え、単元の終末で、根拠となる情景描写や会話文に着目すれば良いという自分の学びについて、振り返りを書いている。

対話的な学び 他者とのやり取りや読書によって、考えを広げたり、深めたりすること。

- (例) 地域や外部の人にインタビューを行ったり、分かったことを友達に報告したりする中で、それまでの自分の見識を広げたり改めたりしている。
- (例) リーフレット作りの過程において、ペア対話の中でもらった助言を基に見出しの言葉を書き換えたり、友達のレイアウトのよさを相手に伝えたりしている。
- (例) 伝記を読んで、不断の努力の大切さを痛感し、自分の生活を見直そうとしている。

深い学び 「言葉による見方・考え方」を働かせながらより深く理解したり、表現したりしながら自分の思いや考えを広げ、深めること。

- (例) 五感を用いた文章の書きぶりを習得した後、普段の生活でも五感表現のよさを実感するようになり、スピーチでも五感表現を取り入れようとしている。
- (例) 友達の発表を聞いて、自分とは異なる視点に気づき、新たな問いをもって解決方法を転換させる等、自分の考えを深めている。
- (例) 新聞記事・見出し・リード・写真・キャプションに込められた書き手の意図を読み取る際の観点を習得した後、家庭の新聞も批判的思考をもって読んでいる。

ウ 単元を見通して、その中で育む資質・能力の育成

授業改善を進める際の配慮事項として、「主体的・対話的で深い学びは、必ずしも 1 単位時間の授業の中で全てが実現されるものではない。単元など内容や時間のまとまりの中で、例えば、主体的に学習に取り組めるよう学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりして自身の学びや変容を自覚できる場面をどこに設定するか、対話によって自分の考えなどを広げたり深めたりする場面をどこに設定するか、学びの深まりをつくりだすために、児童が考える場面と教師が教える場面をどのように組み立てるか、といった視点で授業改善を進めることが求められ⁽⁷⁾とあります。「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善は、単元を見通して行うことが必要です。

そこで、本研究委員会では、「主体的・対話的で深い学び」の視点で授業改善を図る際に、どのような手立てが有効かを検討し、それらを単元の一次、二次、三次に分けて整理しました（次頁表 3）。前項に例として挙げた児童の姿を目指すために、単元前や単元後に講じるべき手立てもあると考え、表の中に位置付けています。なお、主体的な学び、対話的な学び、深い学びは、それぞれが相互に関連しながら実現されるものであるため、手立てについても分類することは難しいと考えます。ただし、ここでは便宜上、3 つに整理して示すこととしました。

学習の見通しと振り返りについて、佐賀大学教育学部の達富洋二先生に伺いました。

達富先生「学びどき・教えどき」



次の学習の見通しにつながる振り返り

主体的な学びには学習の見通しと振り返りが必要です。学級で共有している学習計画だけではなく、自分自身が粘り強く学習を進め、次の学習につないでいくためにも、自分の学習を知ることが必要だからです。しかし、児童は「どのように見通しを立てたらいいのか」「学習を振り返るといことはどのようにすることなのか」を知らないことが少なくありません。ですから、個々の学習の見通しや振り返りを互いに知ることが有効です。例えば、前の時間に書いた学習の振り返りの中から、学級で共有して二次活用すると効果的だと考えられるものを、1 枚のプリントに編集して配付して読み合うことで、振り返りの仕方を知ることになります。このことは、これからの単元の見通しを立てることの手掛かりにもなります。

毎時間の終わりに形式的に振り返らせるのではなく、単元の学習の中で「振り返るとどのようないいことがあるのか」「見通しをもつことでどのようなことができるようになるのか」ということと重ねて「見通し・振り返り」を位置付けることが大切です。

※主体的な学び、対話的な学び、深い学びはそれぞれが相互に関連しながら実現されるものであるため、手立てについても一概に分類することは難しいと考えます。ただし、ここでは便宜上、3つに分類して示しました。

表3 「主体的・対話的で深い学び」の視点を踏まえた授業改善の手立て

	主体的な学び	対話的な学び	深い学び
単元前	<ul style="list-style-type: none"> ○当該単元に関わる基礎的な知識や関連する話題について、事前に児童へさりげなく提供することで、レディネスを調整する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○多様な考えを受容できる学級の支持的風土を培っておく。 ○読書の機会を多く設定することで、多様な作者や筆者の考えに触れさせ、児童の思考を深めたり、活性化させたりする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○語彙を豊かにするための取組を日常のかつ継続的に取り入れることで、児童の思考を深めたり、活性化させたりする。 ○学校行事や地域行事、他教科の年間指導計画と照合しながら単元配列を入れ換えることで、当該単元における指導事項を効果的に身に付けさせる。
一次(つかむ)	<ul style="list-style-type: none"> ○事前にリサーチした、児童の身近な話題や興味を踏まえて言語活動を設定することで、意欲を喚起する。 ○児童と一緒に学習計画を立てることで、学習のゴールやそこまでのプロセスのイメージをつかませる。 ○言語活動のゴールの具体例を示すことで、児童の「あなりたい」「こうしたい」という願いや思いを存分に引き出す。 ○児童の学習履歴や単元の特質に応じて学習過程に軽重を付けることで、より有意義な学習となるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○児童間の認識のずれや問いを洗い出すことで、学習課題を考えさせる。 ○児童が考えを整理したり、書き出したりする時間を確保することで、円滑な話し合いを促す。 ○話し合いの中で、書き出した考えを比較して傍線等のチェックをさせることで、共通点や相違点を明らかにさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○言語活動のゴールの例を提示する際、その内容を工夫することで、児童の課題意識を高める。 <ul style="list-style-type: none"> ・教師による範例 ・児童による範例 ・教師による範例と改善の余地が残る例の対比 ・児童の実態に即した例と範例の対比 ○学習課題で、何をどのようにすれば、どのような力が身に付くのかを児童と共通理解しておくことで、学習への目的意識や必要性を実感させる。

	主体的な学び	対話的な学び	深い学び
二次 (深める)	<ul style="list-style-type: none"> ○児童による自己選択や自己決定の場を設けることで、課題の解決に向けて積極的に考えさせる。 ○到達基準を児童に示すことで、単元の途中でも児童に目的意識や意欲を持続させる。 ○本時の終わりに、次のような視点を適宜与えた上で振り返らせることで、次時の学習へ見通しをもたせる。 <ul style="list-style-type: none"> ・分かったこと ・できるようになったこと ・習得状況 ・参考になった友達の考え ・次時の学習で取り組むべきこと、取り組みたいこと 	<ul style="list-style-type: none"> ○学習場面に最適な対話形態を選択することで、児童の思考を促す。 ○話し合う際の観点や目的を明確に示すことで、話合いの焦点化、活性化を図る。 ○ICT機器を活用することで、話合いの焦点化、活性化を図る。 ○思考ツールを用いて考えを整理させることで、自他の考えを俯瞰して捉えさせる。 ○学習活動が停滞した際、児童の困り感を基に解決方法を話し合わせることで、自力解決を促す。 ○学習成果を中間発表として他者に披露させることで、互いのよさや改善点に気付かせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○キーワードを与えて学習を振り返らせることで、できたことや分かったことの原因や根拠を考えさせる。 ○板書やワークシートを工夫することで、児童が学びの道筋や思考の過程をたどることができるようにする。 ○他教科等で学んだことと関連付けて考えさせることで、多様な課題の解決方法に気付かせる。 ○中間発表で他者から質問や助言を受ける場を設定することで、課題の解決に向けた再検討や修正を促す。
三次 (まとめる)	<ul style="list-style-type: none"> ○単元の終末で、学んだことの意義や改善点、自分の変容について振り返らせることで、成長を自覚させるとともに、次の学習につなげさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○互いのよさについて伝え合わせることで、学んだことを客観的に確認させるとともに、次の学習への意欲を喚起する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○習得した知識及び技能、考え方をカードやファイル等に蓄積させておくことで、次の学習でも活用できるようにさせておく。
単元後		<ul style="list-style-type: none"> ○習得した知識及び技能に関する自主学習の取組について他の児童に紹介し、広げる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○習得した知識及び技能、考え方を日常生活の中で活用し、役立てられる場を設定する。

エ 「深い学び」の鍵となる「言葉による見方・考え方」

新学習指導要領解説では、「深い学び」の鍵として、児童が「見方・考え方」を働かせることが重要であると示されています。各教科等の「見方・考え方」について、次のような記載があります⁽⁸⁾。

- 「どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのか」というその教科等ならではの物事を捉える視点や考え方である
- 各教科等を学ぶ本質的な意義の中核をなすものであり、教科等の学習と社会をつなぐものである
- 児童生徒が学習や人生において「見方・考え方」を自在に働かせることができるようにすることにこそ、教師の専門性が発揮されることが求められる

(※下線、太字は本研究委員会による。)

文部科学省 『小学校学習指導要領解説国語編』 平成 29 年 7 月 p. 4

国語科においては「言葉による見方・考え方」について、新学習指導要領解説で以下のように記載があります⁽⁹⁾。

言葉による見方・考え方を働かせるとは、児童が学習の中で、対象と言葉、言葉と言葉との関係を、言葉の意味、働き、使い方等に着目して捉えたり問い直したりして、言葉への自覚を高めることであると考えられる。様々な事象の内容を自然科学や社会科学等の視点から理解することを直接の学習目的としない国語科においては、言葉を通じた理解や表現及びそこで用いられる言葉そのものを学習対象としている。このため、「言葉による見方・考え方」を働かせることが、国語科において育成を目指す資質・能力をよりよく身に付けることにつながる事となる。

(※下線、太字は本研究委員会による。)

文部科学省 『小学校学習指導要領解説国語編』 平成 29 年 7 月 p. 12

また、「対象と言葉、言葉と言葉との関係を、言葉の意味、働き、使い方等に着目して捉えたり問い直したり」することについて、次のように補足されています⁽¹⁰⁾。

「対象と言葉、言葉と言葉との関係を、言葉の意味、働き、使い方等に着目して捉えたり問い直したり」するとは、言葉で表される話や文章を、意味や働き、使い方などの言葉の様々な側面から総合的に思考・判断し、理解したり表現したりすること、また、その理解や表現について、改めて言葉に着目して吟味することを示したものと見える。

(※下線、太字は本研究委員会による。)

文部科学省 『小学校学習指導要領解説国語編』 平成 29 年 7 月 p. 154

児童が「言葉による見方・考え方」を働かせる授業づくりについて、佐賀大学教育学部の達富洋二先生に伺いました。

達富先生「学びどき・教えどき」



児童が「言葉による見方・考え方」を働かせる授業づくりのためには、質の高い学習課題の設定が有効です。

単元のはじめに単元を通した学習課題を設定することで、児童が見通しをもって学習を進めることができます。この単元で育成を目指す力を明確に示すことにより、児童は常に何を学ぶ単元であるのかを意識することができます。また、学習を振り返る際も自身の学びや変容を自覚することにつながります。

学習活動をどのように進めていくのかという具体的な方法が示されているので、児童が自ら問いを見い出して解決したり、児童同士の協働を通して考えを広げ深めたりすることの手掛かりとなります。教師にとっても単元のゴールを見据えることができるため、計画的な評価を行うことにもなります。

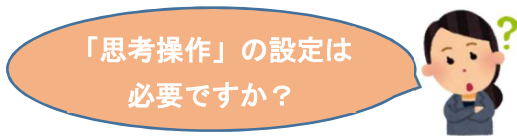
学習課題は、「指導事項（Aフレーズ）」「思考操作（Bフレーズ）」「言語活動（Cフレーズ）」の3つを組み合わせ、次の手順で設定します。

- ①児童に身に付けさせる力を明確にする。 ← 学習指導要領に準拠した指導事項か
- ②ふさわしい言語活動を設定する。 ← 児童が主体的に学ぶことができるか
- ③思考操作を具体的に決定する。 ← 児童がどのように思考を働かせるか

(学習課題の基本的な形式)
「—(A)—について (を)、—(B)—をして、—(C)—する」
 (指導事項) (思考操作) (言語活動)

表 思考行為動詞

思考操作(思考行為動詞)	
収集する	
比較する	関係づける
選択する	組み合わせる
順序づける	多面的に見る
区別する	一般化する
分類する	構造化する
評価する	具体化する
推論する	抽象化する
など	など
共通/相違/順序 考えと理由・事例/全体と中心 原因と結果 中心的と付加的/事実と意見/意見と根拠/全体と部分/具体と抽象	



学習課題で「内容課題（指導事項）」と「活動課題（言語活動）」を示しても、実際にどのように考えていけばいいのかが分かりにくい児童に「考えましょう」といくら繰り返しても、学習は深まりません。「考える」とは、具体的にどのようなことなのかを具体的に児童に示すことが大切です。

設定した言語活動が価値ある活動となり、学習課題を解決していく学習とするために、学習課題の中に、思考行為動詞（左表）を取り入れましょう。

引用：「国語教室の創造 学びどき・教えどき」資料
 佐賀大学 達富洋二研究室 2017年4月 Ver.046

達富先生「学びどき・教えどき」

「ちいちゃんのかげおくり」（光村図書 3 年）の例

- (A：指導事項) 場面の移り変わりを捉える。
- (B：思考操作) 場面ごとの出来事を選んで比べる。
- (C：言語活動) 「あのとき・このとき 感想」カードに書く。



学習課題

この単元では、場面の移り変わりについて学習します。
実際には、「あのとき・このとき 感想」カードを書きます。
書くときは、「あのとき」と「このとき」の出来事を選んで比べるようにします。

オ 学習過程の明確化

今回の改訂では、活動そのものが目的とならないよう、活動を通じてどのような資質・能力を育成するのかを示すために学習過程が明確化されました。学習過程の明確化は、前回の改訂（H20）でも改訂の要点として挙げられていましたが、両者を比較すると、今回の改訂で学習過程がより一層細分化して示され、各過程における指導事項が位置付けられたことが分かります。

本研究委員会では、各領域の学習過程について、新学習指導要領解説と現行学習指導要領解説を対応させて整理し、改訂のポイントをまとめました。

A 話すこと・聞くこと

学習過程（新）		指導事項（新）	学習過程（現行）
話すこと	話題の設定 情報の収集 内容の検討	日常生活の中から話題を決め、集めた材料から必要な事項を選んだり、その内容を検討したりすること。	話題設定や取材
	構成の検討 考えの形成	話の内容が明確になるように、構成を考えることを通して、自分の考えを形成すること。	話すこと
	表現 共有	適切に内容を伝えるために、音声表現を工夫したり、資料を活用したりすること。	
聞くこと	話題の設定 情報の収集	日常生活の中から話題を決め、集めた材料から必要な事項を選んだり、その内容を検討したりすること。	話題設定や取材
	構造と内容の把握 精査・解釈 考えの形成 共有	話し手が伝えたいことと自分が聞く必要のあることの両面を意識しながら聞き、感想や考えを形成すること。	聞くこと
話し合うこと	話題の設定 情報の収集 内容の検討	日常生活の中から話題を決め、集めた材料から必要な事項を選んだり、その内容を検討したりすること。	話題設定や取材
	話し合いの進め方の検討 考えの形成 共有	進行を意識して話し合い、互いの意見や考えなどを関わらせながら、考えをまとめたり広げたりすること。	話し合うこと

- ・現行学習指導要領の学習過程は、「話すこと」「聞くこと」「話し合うこと」という領域の内容を示す言葉がそのまま用いられているのに対し、新学習指導要領では、単元の学習の流れを意識できるように具体的に示されている。
- ・話題の設定、情報の収集は、「話すこと」、「聞くこと」、「話し合うこと」に共通している。
- ・「話し合うこと」の指導に当たっては、「話すこと」と「聞くこと」に関する資質・能力が一体となって働くため、指導事項との関連を図ることが重要とされている。

B 書くこと

学習過程（新）		指導事項（新）	学習過程（現行）
題材の設定 情報の収集 内容の検討	書くことを見付けたり、相手や目的、意図に応じて書くことを選んだりするとともに、必要な材料を整理し、伝えたいことを明確にすること。	課題設定や取材	
構成の検討	自分の思いや考えが明確になるように文章の構成を考えること。	構成	
考えの形成 記述	自分の考えを明確にし、書き表し方を工夫すること。	記述	

推敲	記述した文章を読み返し、構成や書き表し方などに着目して文や文章を整えること。	推敲
共有	文章に対する感想や意見を伝え合い、自分の文章の内容や表現のよいところを見付けること。	交流

・大まかな学習過程に変更はないが、「記述」と同列で「考えの形成」が挙げられている。「自分の考えを伝えるために、どのような言葉を用いるか（文末表現、敬体か常体か等を含む。）、語や文及び段落の続き方やつながりをどのように表現するか、といったことなどに注意して記述の仕方を工夫する」⁽¹¹⁾（※下線部は本研究委員会による）ことが求められている。

C 読むこと

学習過程（新）	指導事項（新）	学習過程（現行）
構造と内容の把握	叙述に基づいて、文章がどのような構造になっているか、どのような内容が書かれているかを把握すること。	音読 効果的な読み方
精査・解釈	構成や叙述などに基づいて、文章の内容や形式について、精査・解釈すること。	説明的な文章の解釈 文学的な文章の解釈
考えの形成	文章を読んで理解したことなどに基づいて、自分の考えを形成すること。	自分の考えの形成及び交流
共有	文章を読んで感じたことや考えたことを共有し、自分の考えを広げること。	目的に応じた読書

・指導内容や教材の文種による整理から、学習の流れを意識した整理へと変わった。
 ・現行学習指導要領の「音読」は、「知識及び技能」(1)に移行した。
 ・現行学習指導要領の「目的に応じた読書」は、「知識及び技能」(1)に移行した。ただし、指導事項は、「楽しんだり知識を得たりするために、本や文章を選んで読むこと」から、「自ら進んで読書をし、読書を通して人生を豊かにしようとする態度を養うこと」という読書の意義や効用に関するものになった。

〈全領域に共通する改訂のポイント〉

○「共有」に関する学習過程・指導事項が位置付けられた
 →「共有」とは、児童が互いに感想や意見を伝え合う中で、自他のよさを認めることができる資質・能力のことです。現行学習指導要領の「書くこと」「読むこと」領域に位置付けられている「交流」は、活動そのものと捉えられがちであることから、交流する学習過程において働く資質・能力をより明確に示すために改められたものと考えられます。

○「考えの形成」に関する学習過程・指導事項が位置付けられた
 →「どのように社会や人生をよりよいものにしていくのか」という目的を自ら考え、自らの可能性を發揮し、よりよい社会と幸福な人生の創り手となる力を身に付けられるようにすることが重要⁽¹²⁾とする、新学習指導要領の趣旨を受けたものと考えられます。
 （※「考えの形成」については、次項「力 『考えの形成』の重視」で詳しく取り上げます。）

なお、学習過程は必ずしも一方向、順序性のある流れではないとされています。学習過程について、佐賀大学教育学部の達富洋二先生に伺いました。

達富先生「学びどき・教えどき」



新学習指導要領解説に示されている学習過程は、学習を進める順序というわけではありません。単元で育成を目指す力や児童の学習の傾向に応じて学習過程の指導事項に重み付けをしたり、学習過程を往還したりして単元を構想し、柔軟に学習を進める必要があります。

例えば、「書くこと」領域では、どの単元でも全ての学習過程を同じように、そして常に全過程を始めから終わりまで一括りとして扱いがちです。まず「題材の設定、情報の収集、内容の検討」を行い、「構成の検討」を経て、「考えの形成、記述」をさせてから「推敲」の学習を行うというようにです。しかし、ときには「推敲する」ことに重点を置く学習も必要です。その場合、「題材の設定、情報の収集、内容の検討」などと「推敲」とを同等に扱わなければならないということはありません。推敲する文章は必ずしも自分が書いたものでなくても構いません。確かに、自分が書いた文章を推敲することは、文章に対する愛着があるためとてもいいことです。しかし、児童が書いた文章が必ずしも「推敲することを学ぶための効果的な材料」であるとは限りません。「推敲する」学習過程における目指す力を育成するためには、児童の傾向を観察し、推敲することに効果的で適切な文章を教師が提供することがあってもいいわけです。同様に、「記述する」学習過程で育成を目指す力を習得するためには、「題材の設定、情報の収集」などはあらかじめ教師が準備しておき、単元としては「記述する」ことに重み付けをし、必要に応じて、再度、児童が題材の見直しや情報の収集を行うことなども考えられます。

カ 「考えの形成」の重視

前項で述べた通り、新学習指導要領では全ての領域において、学習過程に「考えの形成」が位置付けられました。抜粋して整理すると次のようになります。

A 話すこと・聞くこと

話すこと	構成の検討 考えの形成	話の内容が明確になるように、構成を考えることを通して、 自分の考えを形成すること。
聞くこと	構造と内容の把握 精査・解釈 考えの形成 共有	話し手が伝えたいことと自分が聞く必要のあることの両面を意識しながら聞き、 感想や考えを形成すること。
話し合うこと	話し合いの進め方の検討 考えの形成 共有	進行を意識して話し合い、互いの意見や考えなどを関わらせながら、 考えをまとめたり広げたりすること。

B 書くこと

考えの形成 記述	自分の考えを明確にし 、書き表し方を工夫すること。
--------------------	----------------------------------

C 読むこと

考えの形成	文章を読んで理解したことなどに基づいて、 自分の考えを形成すること。
--------------	---

新学習指導要領解説において、考えの形成を重視する理由については、直接的に示されていません。しかし、今回の改訂の経緯を説明する中で、「人工知能がどれだけ進化し思考できるようになったとしても、その思考の目的を与えたり、目的のよさ・正しさ・美しさを判断したりできるのは人間の最も大きな強みである」⁽¹³⁾としています。また、こうした時代にあつて、学校教育に求められることとして、「様々な情報を見極め知識の概念的な理解を実現し情報を再構成するなどして新たな価値につなげていくこと、複雑な状況変化の中で目的を再構築することができるようにすること」⁽¹⁴⁾を挙げています。

さらに、学習指導要領の改訂に先立って行われた中央教育審議会答申では、国語科における考えの形成について、次のような記載があります⁽¹⁵⁾。

事物、経験、思い、考え等を言葉で理解したり表現したりする際には、対象と言葉、言葉と言葉の関係を、創造的・論理的思考、感性・情緒、他者とのコミュニケーションの側面から、言葉の意味、働き、使い方等に注目して捉え、その関係性を問い直して意味付けるといったことが行われており、そのことを通して、**自分の思いや考えを形成し深めることが、国語科における重要な学びであると考えられる。**

このため、自分の思いや考えを深めるため、対象と言葉、言葉と言葉の関係を、言葉の意味、働き、使い方等に注目して捉え、その関係性を問い直して意味付けることを、「言葉による見方・考え方」として整理することができる。

(※下線、太字は本研究委員会による。)

中央教育審議会 『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）』 別添 2－1 平成 28 年 12 月

これからの時代を見据えると、特に国語科において、自己の考えを形成する力の育成が重要だということが分かります。

では、実際の授業において、考えを形成するのは、どのような場面なのでしょう。また、どのような手立てによって、考えを形成することができるのでしょうか。

菊池英慈（文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官）は、考えの形成を重視した領域ごとの指導の工夫について、具体的な事例を通して述べています。整理すると、次のようになります。

【話すこと・聞くこと】

（高学年の例） 環境問題を題材にスピーチをする指導

★環境問題について書かれた本などの内容（事実や筆者の考え）をまとめるだけでなく、それらを踏まえた「自分の考え」を話すことができるようにすることが大切。



そのために… 事実と、自分の考えとの関係を整理する。「自分の考え」が客観的な事実裏付けられたものになっているかどうかを振り返り、「自分の考え」をより深めていくことができるようにする。

【書くこと】

（中学年の例） 自分の考えとそれを支える理由や事例といった関係性が明確になるように記述する指導

★自分の考えを伝えるために、どのような言葉を用いるか（文末表現、敬体か常体か等を含む）、語や文及び段落の続き方やつながりをどのように表現するか、といったことに注意して記述の仕方を工夫することが大切。



そのために… 「なぜなら～」、「その理由は～」、「～ためである」などの理由を示す表現や、「例えば～」、「事例を挙げると～」、「～がそれに当たる」などの事例を示す表現を用いることができるようにする。

【読むこと】

（低学年の例） 文章を読んで理解した内容と自分の体験を結び付けて感想をもつ指導

★文章の構造と内容を捉え、精査・解釈することを通して理解したことに基づいて、自分の既有的知識や様々な体験と結び付けて感想をもったり考えをまとめたりすることが大切。



そのために… 読み手の体験は一人一人異なることから、どのような体験と結び付けて読むかによって、感想が異なってくる。児童の発達や学習の状況に応じて、文章との関連を考えながら、実際の経験を十分想起できるようにする。

「考えの形成」について、佐賀大学教育学部の達富洋二先生に伺いました。

達富先生「学びどき・教えどき」



児童に考えをもたせるために

自分の考えをもつということ

大村はま先生は、著書の中で次のように述べておられます。
 (『大村はま国語教室』第6巻 1935年1月 筑摩書房 p.175)

自分で問題をとらえて書くということは、たいへんむずかしいことである。それが、ここに、一人の人が問題を出し、一つの意見が出て、それについてどう思うか、ということになると、自分なりに何か考えが出てくるものである。もちろん、このようなところから出発して、鋭い観察で問題をとらえる方へ進むのであるが、ほかの人の意見が出されてから、それに組み込んで、自分の考えを育てていくことも大切なことで、その人自身のものでないというように、一段低く考えることもないと思う。文章は、それが読まれることが書き手を意欲的にする。この学習では、書いたものが確実に友だちに読まれ、その友だちの書くことに役立てられていく。優れた文章でなくても、それなりに読まれ、次の書き手のささやかな栄養になっていく。そして、自分もまた、友だちの文章によって、目に見えて育てられる。あまり興味を持たなかった問題についての投書でも、何人もの友だちがそれぞれの意見を書いている。その文章を読んでいるうちに、いつのまにか、その問題を考え始めていて、一つの意見が書けたりする。

何もないところから意見をもたせるだけではなく、はじめは誰かの意見に寄り掛かりながら自分の意見を見付けていくこともいいと思うのです。学習課題の指導事項(Aフレーズ)についていきなり考えるというのは、思いの外、骨の折れることだと思います。

だからこそ考えをもつきっかけとなる言語活動(Cフレーズ)を設定することが大切です。例えば、「ある人の投書(考え)に返事を書こう」、つまり「投書」の「返書」を書くという言語活動です。異なる考えを書いてもいい。賛成する考えを書いてもいい。他の話題を提供してもいい。そんな活動ですから、どの子供も自分の考えをもちやすくなるのです。書き始めたら、しっかりと時間を掛けて粘り強く向かっていけるだろうと思います。ただし、書き始めるまではある程度の時間は必要ですし、考えに対する考えをもつということを具体的に教えることも、ある程度は必要だと思います。

ある問題に関わる「ある人の考え」について「自分はどのような考えをもつか」

ある問題に関わる自分の考えをもたせる場合、ゼロから考えをもたせるのではなく、その「問題」に関わる「ある人の考え」について自分の考えをもつようにさせる活動は効果的です。「投書」の「返書」を書くということは、「ある人の考えについて自分の考えをもつ」ということです。

そもそもその「問題」について「自分はどのような考えをもつか」

そのような言語活動の延長として、そもそもその「問題」について「自分はどのような考えをもつか」という活動が実現します。自分からはじめの「投書」を書くという活動がこれに当たります。その投書にどのような返書が届くかを考えながら書くことで、自分の考えはより明確になります。

(次頁へ続きます。)

問いのないところに考えは生まれない

「あまり興味をもてなかった問題についての投書でも、何人もの友達がそれぞれの意見を書いている。その文章を読んでいるうちに、いつのまにか、その問題を考え始めていて、1つの意見が書けたりする」ということがあります。これは、誰かの意見を基にすることで、自分の「問い」を立てることができ、その解決の過程の中で自分の考えをもつことができるということです。自分の「問い」を立てたからこそ、自分の考えを形成することができるのです。

価値ある言語活動を位置付け、学習課題（A、B、Cの3フレーズで構成された課題）を設定した単元においては、児童が自分の「問い」を立て、自分の考えをもつことが可能ですが、作品内容に依存した発問による授業では「問い」を立てることも、自分の考えをもつことも容易ではありません。教師は、児童が自分の「問い」を立てることにつながる発問をしたいものです。

（※学習課題の詳細については、**新学習指導要領に関わる理論研究-10、11**をご覧ください。）

キ 語彙指導の改善・充実

新学習指導要領解説では、語彙は、全ての教科等における資質・能力の育成や学習の基盤となる言語能力を支える重要な要素であるとし、語彙を量と質の両面から充実させることが重視されています。具体的には、「話や文章の中で使いこなせる語句を増やすとともに、(略) 語句の意味や使い方に対する認識を深め、語彙の質を高める」⁽¹⁷⁾ ために、各学年において、指導の重点となる語句のまとまりが系統化して示されました。整理すると、**図2**のようになります。なお、**図2**の内容は、あくまでも指導の重点とする語句の目安を示したもので、それ以外の語句についても学習の中で随時取り上げ、日常生活の中で使いこなせるように指導していくことが大切です。

また、6年間を通じて、辞書や事典を利用して必要な語句等を調べる習慣を児童に身に付けさせるよう、新たに明示されました。必要なときに、いつでも辞書や事典が使えるような言語環境の整備の重要性についても示されています。

	第1学年及び第2学年	第3学年及び第4学年	第5学年及び第6学年
量を増す	身近なことを表す語句のまとまり	様子や行動、気持ちや性格を表す語句のまとまり	思考に関わる語句のまとまり
質を高める	・ 意味による語句のまとまりがあることに <u>気付く</u> こと	・ 性質や役割による語句のまとまりがあることを <u>理解</u> すること	・ 語句の構成や変化について <u>理解</u> すること ↓ ・ 語感や言葉の使い方に対する感覚を意識して、語や語句を <u>使う</u> こと

小学校のまとめとして、求められている事項。
中学校国語科における語彙指導の基盤となる。

図2 語彙指導の系統化

《引用文献》

- (1) (15) 中央教育審議会 『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)』 別添 2-1 平成 28 年 12 月
- (2) 文部科学省 『小学校学習指導要領解説国語編』 平成 29 年 7 月 p. 10
- (3) 文部科学省 『小学校学習指導要領解説国語編』 平成 29 年 7 月 まえがき
- (4) (9) 文部科学省 『小学校学習指導要領解説国語編』 平成 29 年 7 月 p. 12
- (5) 文部科学省 『小学校学習指導要領解説国語編』 平成 29 年 7 月 p. 13
- (6) 文部科学省 『小学校学習指導要領解説国語編』 平成 29 年 7 月 p. 4
- (7) 文部科学省 『小学校学習指導要領解説国語編』 平成 29 年 7 月 p. 153
- (8) (10) 文部科学省 『小学校学習指導要領解説国語編』 平成 29 年 7 月 p. 154
- (11) 文部科学省 『小学校学習指導要領解説国語編』 平成 29 年 7 月 p. 33
- (12) 文部科学省 『小学校学習指導要領解説国語編』 平成 29 年 7 月 p. 3
- (13) (14) 文部科学省 『小学校学習指導要領解説国語編』 平成 29 年 7 月 p. 1
- (16) 文部科学省 『小学校学習指導要領解説国語編』 平成 29 年 7 月 p. 8